

茶道の記憶

大妻女子大学3年（東京都）

宮脇 加奈子

「茶道やっているって言っていたけど、何が面白いの？」これは世間話の続きとばかりになんとなく、大学の友人からかけられた言葉だった。それまで漠然と面白いな、続けたいなと思ってお茶を習ってきた私は、この言葉を受けて、一瞬答えに詰まってしまった。そこで、いい機会だから自分の感じる茶道の魅力とはなんだろうと改めて考えてみることにした。

大学で茶道を通して1番記憶に残っているのは、昨年8月に行った葉月茶会である。大学に入ってから初めての本格的な茶会で、右も左も分からないなりに強く感じたことがある。

それは茶道というのは非日常的な空間であるということだ。お茶会が始まった途端、浮ついていた気持ちがびしりと引き締まり、和やかながらも静かな空間は日常を忘れさせてくれる。そしてその場で一碗や出会いは一期一会のかけがえのないものだと考えると、その時間だけが日常から切り離され、他では得られない充実感が得られると思う。

また、私は様々な部分から季節を感じられる空間が魅力的だと思った。透き通った硝子の茶碗に、琥珀糖の透明感のある朝顔、窓から覗く涼し気な池など、その場を構成する全てから夏を連想させられた。「季節」は現代を生きる人間にとって希薄になってきたもののひとつであると思う。かくいう私も例に漏れず、季節の花も移り変わりも知らずにコンクリートジャングルの中を過ごしてきた。茶道はそんな私たちを、日常から非日常へ引き上げてくれる存在であると思う。お茶を一服飲む間は仕事のことを忘れ、普段は見逃してしまいがちなことに目を向け、「お茶会」という空間を楽しめる。これは茶道を学んできた中で得られた発見であったと思う。

そのほかにも、茶道を続けてきたなかで、私の心を変えてくれた言葉がある。それはとあるお茶会に招待されたときに、飾られていたお軸に書かれていた言葉で、「江月照松風吹」というものだ。これは、自然はとても雄大なものだから肩肘張らずにありのままであることが大切であるという意味らしい。その時の私はやるべき事の多さに振り回され、気を張っていたのだが、この言葉と共に、まあ座ってお茶でも召し上がれと声を掛けられると、途端に自分の悩んでいたことが小さいことに思えて、なんだか晴れ晴れとした気分になったのだ。茶会に行っても人生が変わるというような大層な話では無いが、当時の私にとっては天啓のようなもので、それ以来、穏やかな気持ちで物事に取り組めるようになった。そのため、その言葉に出会う場となった茶道は、やはり面白いと気づかされ、今まで続けて来たのだと思う。

茶道はお堅いイメージがついてまわるせいで、私もはじめ、しっかりしないといけない、粗相をしてはならないと、緊張しながら茶室に足を踏み入れていたのを覚えている。しかし、今は肩肘張らずに茶室の空間を楽しめるようになりたいと思えるようになった。茶道に関わったことがない人の中にはきっと始める前の私と同様に堅苦しい、難しいと思って遠巻きにしている人もいると思う。私はもしそんな友人に出会ったら、自分の見つけた発見を伝え、一度茶会に足を運んでみないかと声をかけてみたい。